

## 持続可能な奉仕を

今日は午後から教会全体修養会が予定されています。一昨年は主の祈りを学び、昨年は使徒信条を学びました。今日は三要文と呼ばれる教会の「三つの重要な文章」の最後、十戒を皆で学ぶ予定です。主の祈りや使徒信条と比べると、十戒が教会の中で取り上げられるのは少ないかもしれません。けれども十戒は三要文の一つに入れられていることから分かる通り、私たち教会にとって非常に重要な文章です。今日は普段はあまり意識されないかもしれないこの文章をしっかりと学んで、私たちの信仰生活を豊かなものとしていきたいと考えています。1時間ほどで終わる予定ですので、一人でも多くの方にお残りいただいて、有意義な学びの時をご一緒したいと存じます。

さて、そんな今日は聖書の中からルカによる福音書 10:38～42 を取り上げさせていただきました。イエス様と交流のあった、マルタとマリアという二人の姉妹のお話です。マルタがイエス様を家に迎え入れ、イエス様をもてなすためにあれこれとせわしく立ち働いていた時、マリアはこれを手伝おうともせず、ただイエス様のそばに座って彼の話聞いていました。これを不平に思ったマルタはイエス様に彼女を注意してくれるようにと頼みます。しかし、イエス様はマルタのこの頼みを退けて、「あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。しかし、必要なことはただ一つだけである」と彼女を優しく諭すのです。

このお話の解釈をめぐるっては、古くから様々な議論が行われてきました。その多くは、祈りや瞑想によって御言葉を聞くことを重視するマリア型の(修道院のような)観想的な生活と、誰かをもてなすといったような色々な奉仕を重視するマルタ型の活動的な生活と、どちらの信仰生活が優れているのかという議論だったようです。イエス様がここでマルタを諭し、マリアを擁護しているのだから、当然マリア型の観想的な信仰生活が優れているんだろうとか、いやいや、そうじゃない、この個所は一見そういう風に読めるけれどもそれは間違いで、実はこうこう、こういう風に解釈することができて、実はマルタ型の活動的な信仰生活をこそイエス様はよりよいものとして評価し

ているんだとか、もう本当に幅の広い議論が行われてきました。

しかし、イエス様の御生涯を振り返ってみれば、私はここでマリア型の信仰生活、マルタ型の信仰生活と、私たちの信仰生活を二つに分けてしまうことに疑問を感じます。イエス様は荒野で悪魔から誘惑を受けられた時、「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」と、神様の御言葉を聞くことを断食後の食事よりも大切にされました。そしてこの御言葉に聞き従い、当時最も貧しく小さくされていた人々に寄り添って仕え、十字架に至るまで熱心に活動されたのです。

イエス・キリストに従う群れとして、私たちは信仰生活において、神様の御声を聞くことと隣人に仕えること、またキリスト者としての奉仕を切り離して考えることはできません。私たちの信仰生活は、神様の御声を聞くことから隣人に仕えること、またキリスト者としての奉仕を行っていくことへと直接繋がっていきます。では、本日の聖書箇所のお話は、いったいどのように解釈されるべきでしょうか。

私はそれは、イエス様がマリアとマルタのどちらの信仰的態度を良しとしたかということではなくて、この世の事柄で心をいっぱいにして、隣人愛、またキリスト者としての奉仕を実践していくための肝心の要となる神様の御声を聞くことができなくなってしまうということがないように、そのようにして神様にも隣人にも心が向かなくなってしまうということがないようにというイエス様の教えだったのだと思います。マルタは客人をもてなすということに囚われるあまり、イエス様の御言葉を聞くことから遠ざかり、また自分を手伝うことをしないマリアを責めて隣人同士互いに仕え合い、睦み合うことから遠ざかってしまっていました。そのようなマルタに対し、イエス様は「必要なことはただ一つだけである」と、この世の事柄を為す時も、奉仕を行う時も、隣人と関わっていく時も、いつも御自分の御言葉を聞くということが根底にあるようにと優しく彼女を諭したのだと思います。

イエス様のこの教えは、特に今の私たちの教会にとってとても大切なものではない

でしょうか。今、信徒数の減少と高齢化が日本のどこの教会でも共通する課題となっています。その中で一人ひとりの奉仕の負担が大きくなりすぎていると感じているのは私だけでしょうか。

くしくも先月の17日～18日にかけて、東日本同信会の研修会で埼玉県の熊谷市に行っていました。この研修会のテーマは「教会の危機と展望 ～教会にどんな将来があるのか～」というものでした。そこで全国同信会人事委員会の長をしておられる同志社教会牧師の菅根信彦先生からこんな報告がありました。

「2020年度の礼拝出席者は全国で37,000人弱であり、これは(コロナ前の)前年度と比べて約11,000人の減少であった。2021年度はさらに35,000人に落ち込み、2022年度は38,000人弱に回復している。ところが、コロナ以前の10年間を見ると、教団全体の礼拝出席者は平均して毎年900人程度の減少を続けてきた。こうした従来の減少平均からすれば、もしコロナ禍がなかったとすれば、22年度の出席者数は45,000人台が予想される場所である。しかし、実際にはそれより7千人以上も少ない数値が報告されている。」

これは『礼拝と音楽誌』という雑誌の2024年春号で礼拝学者の越川弘英先生が報告しておられたことですが、菅根先生はこの報告をもとに「コロナ禍の『消えた7千人』はどこに？」と、コロナ禍の影響で7千人以上の会衆がまだ対面礼拝に戻っていないコロナ後の教会の現状を報告しておられました。つまり、7千人もの人が礼拝から離れてしまったと言うのです。その理由としてはインターネット環境に慣れてしまったということもあると思いますが、これまでの教会の関わり・交わりの在り方が問われた、持続可能な奉仕の在り方が検討されていると菅根先生は言います。

これは兵庫県の神戸の教会で実際に聞かれた信徒の声ですが、コロナ前は日曜日の主日と言えば教会学校の礼拝をし、大人の礼拝を神様にお捧げする。その後当番の人が昼食を提供し、色々な委員会。夕方からは青年が集まってくる夕礼拝のために食事

を作り、夕礼拝に出席して晩遅くに帰ってくる。それがルーティーンだった。しかしコロナで大人の礼拝だけで教会から家に帰って来て、午後2時には昼寝をしている自分がいた。もう元には戻れない。そう言うのです。

これは信徒の方からの切実な声だと私は思います。その教会では伝統的に信徒がそのようにしてたくさんある主日の奉仕を支えてきた、そして豊かな働きを為してきたのだと思いますが、信徒の数も減り、高齢化が進み、一人ひとりにかかる負担が大き過ぎるものとなっていた。そしてコロナでそうした奉仕から一気に解放された時に、自分にどれほどの負担がかかっていたかに改めて気づかされた。そしてもう元には戻れないし、礼拝から離れてしまう人もたくさんいた。先程の礼拝出席者のデータは、そういうことでしょう。

コロナ後の時代、まさに教会の交わり、また奉仕をどのようにしていくかということが問われているのだと思います。今日の聖書のお話で言えば、この世の事柄、またキリスト者としての奉仕でいっぱいになってしまっていて、肝心の神様の御言葉に生かされるということが疎かになってしまっている、そういう本末転倒の事態が今の教会のあちらこちらで起きているということでしょう。

そのような中で時々教会での奉仕に疲れて、信徒がたくさんいる教会に転会される方も見受けられます。私が伝道師時代を過ごした甲東教会は平均礼拝出席が140人～160人ほどの大きな教会でしたから、ここなら信徒がたくさんいるし、一人ひとりの奉仕の負担も少ないだろう、あわよくば奉仕をしないで礼拝にだけ出席していても目立たないと言いますか、紛れられる、そのように本音を打ち明けて転会して来られる方もおられました。今後そうした傾向が益々進んでいくなれば、キリスト教界全体の礼拝出席が減少していく中で、さらに信徒がたくさんいる教会に人が集まって、信徒の少ない教会が益々過疎化していく、そして消えていく、そうした状況が進んでいくのではないかと懸念されます。

教会にとって何が一番大切か、そのことを改めて整理する中で、私たちは今こそ持続可能な奉仕を追い求めていかなければなりません。教会にとって一番大切なもの、それは礼拝です。礼拝において集う一人ひとりが神様に会い、御言葉に生かされ、魂を満たされる。神様と隣人との出会いに心を慰められる。支えられる。そしてこの世へと遣わされていく力を与えられる。まずはそれを徹底したいと思います。

無論教会が教会であるためには、地域、社会の課題を担い、地域、社会に仕えることがなくてはならないわけですが、私はそうした奉仕は何も一つの教会で完結して担っていく必要はないのではないかと考えています。教区に例えば社会部といった様々な部門がありますし、教区の中で教誨師の働きなどをされている方もおられます。それらに関心を持ち、連帯していくというのも地域、社会に仕える教会の一つの在り方でしょう。人権、平和に関しては日本キリスト教団に部落解放センターがありますし、教団という枠を超えるなら、NCCという超教派の団体に色々な機関が置かれています。このように教区・教団の様々な機関、また教団外の様々な機関とも連携して、一つの教会では担いきれないこの世への奉仕を担っていくという在り方が模索されても良いのではないのでしょうか。

また子どもの教会に関しても、無牧の期間、教区や他の教会のイベントと一緒に参加させてもらえないかというお話も出ていましたし、無牧の期間が終わってもそうした方向を模索しても良いと思うのです。一つの教会で子どもも子どもの教会のリーダーの数も減ってきている時代、例えば地区の教会でそれぞれの教会のリーダーが集まって、地区の子どもたちに神様の愛を伝えていく働きを担っていく、一つの教会では担いきれない働きも行えるようにしていくということも考えて良いでしょう。

教会にとって大切な事柄を整理し、教会内の奉仕を持続可能なものに整理していく、そしてその分縮小してしまう事柄に関しては、教会の垣根を超えることによって、また教区・教団、教団外の機関と連携することによってその働きの可能性を模索していく、これが今の教会が共通して取り組んでいかなければならない課題ではないでしょ

うか。

願わくは神様が良き知恵を与えてくださって、私たちに教会の働きを整えさせていただきますように。奉仕奉仕で魂が枯渇していく悪循環から抜け出して、教会生活で本当に魂が充たされていく、そして日常生活においても力を与えられていく生活のリズムを皆で一緒に整えていきたいと願います。

祈りましょう。 ——以下、祈祷——